

ほら、おまいら喜べ。  
プリコネの二次小説だ  
ぞ

憩 恋子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——これは、むつつりスケベな主人公が脳内で気持ち悪いことを考えながらも、真面目にストーリーを進める物語である。

原作では弱くて赤ちゃんレベルの知能しか持たない主人公に、プリコネを楽しくプレイしていた男が憑依する。

男は美少女には笑っていてほしいと願うが故に、鍛錬武者修行なんでもござれをしつつ憶えていたキャラストoryをこなして好感度を上げる。

そんな、駄作だ。

# 目次

## 序章

序章 コツコロちゃんが可愛いすぎる

件 ————— 1

## 第1章 謎の少女と記憶の鍵

第1話 ドジっ子メイドからの依頼

12

第2話 招かれざる乗客とお喋りな秘

密結社 ————— 24

## 第二章 誓約女君

第1話 マホ姫のおもてなしと享樂の

宴の始まり ————— 40



## 序章

## 序章 コツコロちゃんが可愛いすぎる件

「はじつめ、ちよろちよろ……♪ な〜か、ぱっぱ……♪ あかつご泣いても、蓋とるな  
〜……♪」

ひどく可愛らしい声が聞こえた。それはとてもとても聞き慣れた、あの娘の声に似ていた。

僕は閉じられた瞼をゆっくりと開く。

「……おや。お目覚めになられたのですね、主さま」

最初に瞳に飛び込んできたのは、頬を桃色に染めた御尊顔。大きくくりくりな撫子色の双眸は、僕を見つめていた。そして癖のある濃厚な白髪は、すごく触り心地が良さそうだった。

気になるのは、その髪から覗く尖った耳。普通の人間とは異なった耳が、愛らしく見えた。

つまり何が言いたいかというと——僕の推しだった。

アイエエエ!?? コツコロ!?? コツコロナンデ!??

「わたくしは、偉大なるアメスさまによって派遣された『ガイド役』……名前は、コッコロと申します。どうぞ、お見知りおきを」

そんなことは、もちろん知っている。

僕が一目惚れして、どのバトルでも必ず使ったキャラなんだから。

ちなみにアメス様も可愛いよね。

というか、僕はプリコネの世界に来たのかつ！

やっただ、ひやつふー！

……こんだけ心の中じゃ騒がしいが、もちろん顔は表情一つ変わっていない。

表情筋が凝り固まっているみたいだ。

まあ、便利だから利用するけどね。

多分これ無かったら気持ち悪いニヤケ顔晒して、基本的に主人公を全肯定するコッコ

ロちゃんですらドン引きさせちやいそうだから。

ハア、ハア……それにしても生コッコ最高すぎるっ！

おっと、そういうえば次は、あの破壊力抜群の台詞が来るはず……

「主さまをお守りし、おはようからおやすみまで……揺籠から棺桶まで、誠心誠意お世話するのがわたくしの役目でございます。何なりとご用命を、主さま」

ああ、赤ん坊になるんじゃないやあ………はっ、なんてバブみだッ!??

思わず記憶喪失で赤ちゃんレベルの知能とかいう設定関係なく、本気で幼児退化しかけてしまった。

コッコロちゃん……恐ろしい子！

そして割とヤンデレ風味なところが、また僕の心をくすぐるんだよね。顔に出ないけど。

「おや、キョトンとされておりますね。ええっと、不躰ではございますが……あなたさまのお名前を、お聞かせ願えますか？」

名前かぁ、そういえばゲームの時はふざけて『ぼーちんハメ太郎』とか入力したっけ。今思い返すと、相当バカな名前付けてたんだなって思うよ。

今度はちゃんと名前付けないと。美食殿以外の娘達とも仲良くしたいし。

僕はその場に立ち上がり、コッコロちゃんにデフォルトネームを教えた。

「ふむ。ユウキさま、と仰るのですね。良かった、わたくしのお仕える主さままで間違いないようです」

やっただぜ。

というか、やっぱり僕が主人公の身体に憑依してるんだね。

だって前の身体より細いし若いし柔らかいしで、何から何まで違うもん。

若いってイイネ！

「よもや人違いなのでは、などと疑って申し訳ありません。ご不快でしたら、何なりと罰をお与えください」

ん？ 今なんでもするって……言っていないですネ、はい。

「鞭で打たれようが何をされようが、わたくしは一向に構いません」

11歳を鞭で打つとか鬼畜の所業で草も生えないよ……むしろ、僕のことを鞭でバチバチに打ってほしいのだが。

……頼んだらやってくれそうだし、今度拜んでみるとしよう。

「アメスさまの託宣によると、主さまは『ほとんどの記憶を失っている』ようなので……わけがわからない状態でしょうけど。わたくしがお導きしますので、どうかご安心を」  
いや、失ってないんですけど。

あつ、前作はやってないから、そもそも記憶に無いのか。

……ごめんね、リダイブ勢で。事前登録してたから許して。

僕が心の中でこっそり謝っていると、ふとすぐ近くの茂みから声が聞こえた。

まあ、誰なのかは判ってるけどね。

「お腹すいた……お腹すいた……」

「はい、心得ております。お昼時ですしね」

コッコロちゃんが目をキラキラさせながらこの場に存在しない声の主に賛同した。



……いっつもストーリー見返す度に思ってたんだけどさ、どう頑張っても男と女の声は聞き間違えないでしょ。

あとコッコロちゃんの『ですしね』の『しね』の部分を聞いてゾクゾクしちゃうのは僕だけじゃないはず。

「主さまがお目覚めになられたら、召し上がっていただくとうと……わたくし、ごはんを炊いておりましたから」

なんていじらしい子なのだろうか。

こんな草原の真ん中で一生懸命ごはんを炊く幼女……絵になるなあ。僕だったら全財産叩いてでも手に入れちゃうね。

コッコロちゃんが袋から弁当箱を取り出して開けると、茂みからティアラをのせた少女が躍り出た。

「うわあい、ごはくん！　ありがとうございますありますがとうございますっ、お腹がすいて死んじゃいそうだったんです！」

少女は万人を虜にするような屈託のない笑顔を浮かべて駆け寄ってくると、コッコロちゃんが持つ弁当箱の中身を食べ始めた。

「ご馳走になりますっ、いただきますあゝす☆　もぐもぐもぐっ」

「……どちらさまでしようっ？」

コッコロちゃんは丹精込めて作ったお弁当が消えていくのを眺めながら、僕にそう訊いてきた。

僕は首を横に振った。

これから長い付き合いになる友人だよと教えてあげたいが、原作準拠しなきゃ僕が対応出来なさそうなので泣く泣く知らないふりをしたのだ。

「もぐもぐもぐっ♪ ふはあっ、ンまっい！ 生き返るうっっ、ごはんは命のエネルギー……☆」

少女はこちらが涎を垂らしてしまいそうなほど美味しそうに弁当を食う。

数秒もすれば彼女は弁当箱の中身を完食し、ニコニコしながらお礼を言ってきた。

「ああ、食べた食べた！ いやあ、助かつちやいました！ 見ず知らずのわたしに美味しーごはんを恵んでくれるなんてっ、良い人たちですね！ 一生恩に着ますっ、ありがとうございまっす☆」

「いや恵んだというか、気づけば食べられていたというか……。ああっ、主さまのために用意したごはんが一瞬で消え失せましたよ？ な、何なんですかあなたは？」

図々しくも礼を述べる少女に、コッコロは空になった弁当箱を見ながら問うた。

僕も11歳の女の子が、僕のためだけに作ったお弁当を食べたかったゾ……。

「わたしは……。いや、それよりも。あの子、あなたたちのお知り合いですか？」

……あの子？ 誰かいたっけ？

全く記憶に無いんだが……。

もしかやこれが記憶喪失というやつか!?!?

「あの子、と仰いますと?」

コッコロちゃんのはて? と首を傾げると、地響きと共にピンク色の髪の少女が現れた。

——背後に大量の魔物を引き連れて。

「きやああつ、助けて〜! 魔物がつ、大量の魔物が追いかけてくる〜!」

……あー、すっかり忘れてた。

本当に、ごめんなさい。プリコネって結構人数が多いから、正統派ヒロインってどうしても霞んじやうんだよね。別に悪口じゃないんだけど。

「おや……何だか、えらいことになってますね。どなたか存じあげないかたが、魔物の大群に追われています。ど、どうしましょう主さま?」

若干おろおろした様子でコッコロちゃんが、僕を見つめていた。

感情表現があまり得意ではないコッコロちゃんの困惑した表情、ご馳走様です。

大丈夫だよ、コッコロちゃん。今さつき餌付けした女の子は、こういう時に頼りになる人だから。

「魔物の群れはこっちに向かっていますし、無視もできません。ちやちやつと片付けてきますので、ふたりは避難してください！ いま助けますよ！ そのひとつ！」

食事に満足していた少女は、腰に差した剣を握って魔物の群れに特攻した。

「えっえっ、誰っ？ わたしを、助けてくれるの……？」

入れ替わりに杖を持ったピンク髪の少女が、困惑した様子で僕とコッコロちゃんに合流した。

「うゝむ。さすがに魔物が多すぎます、わたくしたちも助勢しましょう」

コッコロちゃんがむんつと槍を構える。

※ ※ ※

そんなこんなで僕も剣を担いで魔物を倒しに行ったが、ほとんどコッコロちゃん達が倒してしまい僕の出番は皆無だった。

コッコロちゃんの槍捌きが惚れ惚れするようなものだったのは、言うまでもない。

僕は魔物を興味深く眺めたただけだ。

「ありがとうございます！ お陰で助かりました……危うく食べられちゃうところでした」

「いえいえ、ご無事で何よりでございます。あなた、どうして魔物の大群に追われているのですか？」

「その子っていうより、わたしを狙ってたんだと思いますよ。その子はたまたま通りがかって、巻き込んだ感じがですかね……ごめんなさい、ご迷惑をおかけしました」  
「あなたを？ ええつと、どういうことでしょうか？ というか本当に、あなたは何者なのでしょうか……？」  
「まだ、お名前すら不明なのですけど？」

コッコロちゃん、一文一文全てに疑問符がついてるよ。可愛いすぎて抱き締めちゃいそう。

「あつ、わたしも名乗ってなかったよね。わたし、ユイっていいいます。本当に、助けられてありがとう……♪」

「ああ、はい。わたくしは、コッコロと申します。こちらは、ユウキサマです」  
「えつと……わたしたち、どこかで会ったことがないかな？」

ナンパかな？ ナンパじゃないよ 前作だよ

んー、字余り故に具合が悪い。無能ですね。

「おっ！ みんなつ、こつちにきてください！」

少し離れたところでペコリー……おつと、まだ名乗ってないから僕から明かしちゃダメだよ。

橙髪の少女がブンブンと手を振って僕達を呼んでいた。

「何か倒れてるひとがいるんですよ。回復魔法とか使えるひといましたよね？」

「あつ、わたし回復魔法は得意です！ 倒れてるひと……つて、ええつと？」

猫耳の生えた少女が木々の間に倒れていた。

ふわっ、おまつ——これ、キャルちゃんやんけ！

猫耳触りたい。それと人間の耳があるべき場所がどうなっているのか調べたいんだけど、なんか禁忌に触れそうだから止めておこうか。

「……………」

「どうしたんだろう、このひと？ わたしと同じように、通りすがりで巻き込まれちゃったとか？ 見たところ外傷はないけど、なぜか気絶してる！」

いや、本当に怪我してないかしつかり調べないと。というわけで、触診はまかせろください。

「治療とか、お任せしますね？ まだ魔物がウヨウヨいるので、わたし蹴散らしちゃいます！ みんなは、その気絶してるひとを運びつつ避難してください〜♪」

「避難しようにも、こうも魔物だらけでは身動きがとれませんよ。ええつと、お腹ぺこぺこのペコリーヌさま……と仮にお呼びしますね？ 乗りかかった船です、ともに窮地を脱しましょう」

お腹ぺこぺこって言葉が可愛すぎて鼻血出そう。そして推しがそんな言葉を使うのを間近で聞いてて、可愛すぎて吐血しそう。

コッコロちゃんの過剰摂取は、僕の身体に悪いようだ。

「おやつ、ペコリーヌってわたしですか？　かわいいあだ名をつけられちゃいましたよ  
やばいですね☆　この程度の数なら、わたしだけでもかるく殲滅できるのに♪」

可愛い笑顔で殲滅って言葉を使う辺り、やばいですね☆

「ううん、助けられっぱなしじゃ申し訳ないもん！　わたしも戦います！」

「わたくしたちも参戦しましょうか、主さま」

待て、待つんだコッコロちゃん!!？

僕は他人を強化する能力の使い方なんてわからないよ!?!？

「すみません、何だかドタバタとした出会いになってしまいましたけど。どうか、これか  
ら宜しく願いますね」

ああ、うん。こちらこそよろしくね。

……って、そうじゃなくて戦い方を――

「ここから始めましょう、わたくしたちの物語を……♪」  
ハハッ、ソウデスネー。

## 第1章 謎の少女と記憶の鍵

### 第1話 ドジっ子メイドからの依頼

僕達がランドソルで生活を始めてから、一ヶ月ほどが経過した。

そんな、ある日のことである。

原作ならそろそろコッコロちゃんが路銀が尽きたので働きに出たいと言いつつ、僕に許可を求めてくる場面に入るだろう。

そんなことを考えていると、コッコロちゃんがトコトコと僕に近づいてきた。その足取りは普段より僅かに鈍い。

「主さま、たいへん申し上げにくいのですが……もう、お金がございません」  
ほらきた。

コッコロちゃんの眉が申し訳なさそうに下がる。

「故郷を出立する際に、長老より路銀を頂戴したのですが。さすがに、底をついてしまいました。ランドソルは都会でございますね、物価が高いのです。それでも何とかやりくりして、安宿を探したり、自前で食材を調達したり……。がんばって、節約しておりますけれど。もうお財布が空っぽでございます」



くくつ、ありがとう村長。あなたがくれたお金のおかげで、無事幼女と一ヶ月間同じ部屋で寝ることが出来ました（ゲス顔）。

それはそれとして、僕の財布は潤いに潤っている。しかし、それをコッコロちゃんは知らない。

それはなぜか。もちろん僕がコッコロちゃんに内緒で様々なバイトをしていたからだ。

僕だつてこの一ヶ月間、漫然と過ごしていたわけじゃない。

知り合いの網を全力で広げたり、報酬は良いが少し危険なバイトをしたり。

特に頑張ったのは、僕自身を鍛えることだった。

この世界は凄い。鍛えた分だけ強くなるんだ。努力が必ず身を結ぶ素晴らしい世界だ。それを知ってしまうと、つい限界を超えた努力つてしてみたくなくなっちゃうよね？

などと自問していると、コッコロちゃんがずっと顔を寄せてきた。

はわわつ、近いのです！

「なので、主さま……わたくし、働きに出ても宜しいでしょうか？」

お父さんはそんなこと許さないぞ！ いや、でも原作準拠じゃないと僕が対応（ry

「なるべく、主さまのもとを離れて行動したくはございませんが。わたくし、お仕事を探して……賃金を頂戴し、生活費にあてたいと考えているのです。主さまはごゆるりと

……お心のままに、そのへんで遊ぶなり、美味しいものを食べるなりしてくださいまし」  
それ完全にヒモじゃない！ なにそれやったぜ。

そんなでもってコッコロちゃんの言葉に若干の棘がある気がするのは気のせいだよね  
？

そのへんで遊ぶなり、美味しいものを食べるなりって言葉が僕の胸を刺すんだ。……  
はっ、これが幼女に養ってもらおうという罪悪感か？！

僕が心を蝕む罪悪感と葛藤（興奮？）していると、コッコロちゃんが僕の手を握って  
何かを渡してくれた。

「これは、本日のお小遣いでございます。どうぞ♪」

……ハハツ、やったぜ。

やっぱりまだ罪悪感では興奮出来そうにないや。

「それでは、失礼いたします。夕刻には、宿に戻りますので」

……行っちゃ、ダメだ。僕は幼女に養われたいと常日頃から考えていたが、それはあくまでも裕福な幼女にのみ限る。

僕は金が無いからと幼女を働かせるほど、まだ落ちぶれちゃいない。

「……如何いたしましたか、主さま？ 顔色が、優れないようでございますね。慣れない環境でしょうし、体調を崩されたのでしょうか。心配です……それとも、お小遣いが足り

ませんでしたか？」

違う。違うんだ。

別にお小遣いなんて必要ないんだよ。僕の貯金を切り崩せば、もう一、二ヶ月は遊んで暮らせるだろう。

僕は君に養ってもらいたいが、苦勞してほしいわけじゃない。

ダメな僕を、しようがないなあって目線で甘やかしてほしただけなんだ。

そんな心の叫びなどコッコロちゃんには届かず、終いにはまた眉を下げてしまった。

「すみません。先ほど渡したのが、残りの手持ちのお金のすべてなのです。うゝむ……仕方ありません。わたくしの装飾品などを売って、お金に換えてきますね？」

待つてツ！

——瞬間、僕は馬鹿みたいに上げてしまった身体能力を駆使して、風のような速さで抱き寄せた。

小さくて柔らかい身体を力いっぱい、とまではいかないけど少々力を込めて抱き締める。

たぶん僕が本気で抱き締めたら、コッコロの内臓やら骨やらが、それはもうぐちゃぐちゃになりかねないからね。

「……………うにゆつぽっ？」

コツコロちゃんが腕の中で変な声をあげた。

「主さま。急に抱き寄せられては困ります、公衆の面前でございますから。如何しましたか、わたくしが傍にいないと心細いのでしょうか？」

そんなん当たり前やろ！

コツコロちゃんに内緒でバイトに行く時なんか、傍らにコツコロちゃんがいないと実感しただけで過呼吸になりかけたわ！

「ふむ……主さまも働きたい、と？」

僕は一度、首を縦に振った。

「労働などの苦役はすべて、わたくしが担いたいのですけれど。ひとに働かせて自分だけ遊ぶのも、罪悪感がございますか？」

僕はもう一度、力強く首を振った。……もちろん縦だからね？ このシリアスなシーンでバカ真面目（褒め言葉）なコツコロちゃんに冗談かますとか、僕のガラスハートにガラス以上の強度を求められても無理だお。

「それが主さまのお気持ちでしたら、わたくしは尊重いたします。ふふ、主さまはお優しいかた……♪」

ぐふうっ！ 僕は優しくないんだよ！ 金を持つてるのに自分のためにコツコロちゃんには言い出せないクソ野郎なんだ！ もう罵ってくれた方がマシだあ！ むし

ろ早く罵って！ 再起不能になるくらい扱き下ろしてえ！

「ふたりで稼いだほうが、効率的でございますしね。では、そうしましょうか」

コッコロちゃんは周りを見渡し、

「ええつと……この広場に、求人情報などが貼りだされた掲示板があるはずでございませぬ。その掲示板にて、わたくし良い感じのお仕事を探そうかと考えております。そんな方向で、主さまも構いませんでしょうか？」

もうなんでもええで。あの掲示板、広場にあるだけあつて仕事関係で犯罪に巻き込まれることは少ないから信用できるんだよね（経験者談）。

「では、早速……ああ、あれです。あちらが、件の掲示板でございますね」

コッコロちゃんのお尻を眺めながら、掲示板まで歩いていく。

今日もまた、掲示板の前は大勢の求職者で賑わっていた。

若いエルフの兄ちゃんや杖を持った獣人族の少女……あつ、この人知ってるぞ！

確か名前は……なんだっけ？

ア、ア、ア………アユナ？ アサミ？ サユリ？

すまん、絆ランク上げたのに忘れたわ。ホントすんまそん。

心の中でアユミに恒例のアレをやっていた時、無意識に、本当に意図せず掲示板の前で顔を上げると、脚立に上って作業をするメイドのスカートの中がバッチリ見えた。

「いよつ、おおつと」

見るからに危なっかしい。そもそも脚立の上で爪先立ち&両手が塞がっているとかが狂つてるとしか言いようがない。この人、実は少しの恐怖も感じないやべーやつなのかも知れない。

「うわつ、ひええええええええええ!!?」

——遙か太古、地上に君臨していた王者の恐竜達は、宇宙より飛来した隕石で絶滅したという説がある。

そして今、時代は変わり、人間が地球に君臨していると言つても過言ではない今日。

僕という存在は、滅びを向かえるようだ。

つまり何が言いたいかと申しますと——メイドさんの尻という名の隕石が僕の顔に降ってきた。

これに対して僕は、クンカクンカも辞さない構えである。

ゴスつと鈍い音が響いた。僕が広場の石畳に後頭部を強打した音だ。

もちろんこれくらいじゃ痛くも痒くもない。それにこの程度なら、魔物の角が腹に刺さった時の方がよっぽど痛かった。

もちろん服と腹に穴が空いてたから、コツコロちゃんにバレないようにするのが大変

だったけども。

「いつ、痛てて……」

「だ、大丈夫でございませうか……？　かなり派手に、転倒したようですが……？」

くつ、なんていい匂いなんだ！　なんか、こう、女性特有の匂いが、しかもフニフニと柔らかくて、あああ（童貞の雄叫び）。

「あ痛たた……わつ、ごめんさい！　大丈夫です、ご心配なくつ♪　えへへ……張り紙をしようとして踏み台の上で背伸びしたら、うっかりバランスを崩しちゃいました！

駄目ですね〜スズメったらドジで♪」

と、彼女——スズメは僕の顔から胸辺りに少し移動した。

「……すずめ？」

「あやつ？　これはこれは、ユウキさん！　ご無沙汰しております！　何だが、恥ずかしいところを見られちゃいましたね？」

大丈夫だよ、スズメ。恥ずかしいところは見たんじやなくて、触覚嗅覚味覚で堪能したから。

——僕とスズメは、知り合いである。もちろんそれは、僕が狙って交友を持ち、弛まぬ努力をしたからだ。

可愛い女の子と仲良くなるの最高なんだが。

「……主さま。お知りあいのかたでございますか？」

「あつ、はい！ ユウキさんには、以前ちよっぴり親切にしていたんですよ♪ こちらの子は……ええつと、ユウキさんの妹さんでしょうか？」

僕の娘兼本妻ですが、何か？ とは口に出さない。

「やだ〜かわいいですね♪ お嬢ちゃん、おいくつ？ 今日、お兄ちゃんとデートですか？」

もちろん求職という名のデートです。

「ええつと、妹ではございません……主さまにお仕えしている、コッコロと申します」

……デートは否定しないんですね。つまり、ラブ的な意味で両思いな可能性が微レ存……？

「そうですか！ では、私と同じような感じなんですけどねっ？」

ドジっ子メイドなスズメと一緒にするな。うちのコッコロちゃんはな、1日に二桁枚数の皿を割ったりしないんだぞ！

「同じ、というと？ ええつとスズメさまも、主さまにお仕えを……？」

は？ キレそう。何それ最高じゃん。僕が知らない間にスズメは僕に仕えてたの？

「いやあの、ちがうんです！ ごめんなさい、説明が下手で！ えつと、私はご覧のとおり



りのしがないメイドなんですけどね? とある高貴なかたに、お仕えしてるんです♪」  
コツコロちゃんその高貴な方な、ワイの知り合いやでと無言でドヤ顔を試みるが、こちらに見向きもしなかった。無言なんだから、そりやそうだ。

「今もお嬢さま……そのかたのお遣いで、お仕事を手伝つてくれるひとを探してたんですよ。見てくださいこれ、がんばってつくった求人紙♪」

スズメが広げた大きな紙を見ると、確かに手抜きは認められなかった。僕なら絶対手抜きで何回もやり直しさせられちゃうね。

僕は張り紙の出来栄えしか見ていなかったが、コツコロちゃんは内容を吟味していたようだ。

「ふむ……引越しのお手伝い、ですか。荷物の梱包と、できればそれを運搬する馬車の護衛も? 簡単なお仕事ですけど、かなり破格の報酬でございますね?」

コツコロが訊ねると、スズメは「えへん」と胸を張った。

「うちのお嬢さまは基本的にドケチ……いえ儉約家なんですけど、お金を使うべきときには大盤振る舞いしがちなんです♪」

まあ、お金を払って大切なものが護れるなら、僕だって喜んで払うと思う。

「ユウキさんたち、この掲示板に用があつたんですよね。職探しをしているなら……よろしければ、このお仕事を請けていただけませんか? ご都合があえばって感じですよ」

ど。ぜんぜん知らないひとよりは、面識のあるひとに頼んだほうが安心ですから♪」

「ふくむ……渡りに船ではありませんし、かなり条件もいいのでお引き受けしても宜しいのですけれど。わたくしの一存では決められません。どうしますか、主さま？」

うーむ、ここは確かどいて的なニユアンスの言葉を発するはずなんだが……スズメの柔らかいお尻を上半身で堪能していたい。

僕は泣く泣くどいてと言った。

それを聞いたコツコロちゃんは首を傾げた。

「え？ どういうことでしょう？ ああ……先ほどスズメさまが転んだ拍子に、主さまに馬乗りになつてらつしやいますね？」

「ひあつ？ ぐごご、ごめんなさいごめんなさい！ 私だったら、ほんとにうつかりばっかりで！ ユウキさんに跨ったまま、呑気に世間話なんかしちゃつてましたね！ ししし、失礼しました！すぐにどきます……あわわっ、んひやあうん!!?」

スズメがまた、ボスンと僕のほうへ倒れてきた。

「おお、慌てたせいでバランスを崩してまた転びましたね。もはや馬乗りどころか、主さまと絡みあつて寝そべっている感じに」

？  
実況のコツコロさん、浮気じゃないんですけどスズメさんを抱きしめてもよかですか

「ええ〜つと……ほ、ほんとうにドジなかなのですね。これでは荷運びなどには苦勞するでしょうし、たしかにお手伝いが必要かもしれません」

……そもそも生きるのに苦勞するレベルだよね、これ？

## 第2話 招かれざる乗客～お喋りな秘密結社

「いただきます」

「どうぞ、召し上がれ〜♪」

僕は今、空き箱を積んだ幌馬車の荷台で昼食を食べていた。

御者の男性が馬車を操縦しているので、僕はやることはない。

「えへへ。移動しながらの食事になっちゃってすみません、馬車の手配に時間がかかってしまつて……。バタバタと、出発するしかなかったんです」

スズメがペこりと頭を下げた。

「近ごろ、このへんは物騒ですから。一時的に余所の町に疎開するひとがいたりとかで、なかなか馬車が調達できませんでした。駄目ですな〜段取りが悪くて……。お嬢さまにもいつも叱られるんです、『ちゃんと準備万端、整えてから動きなさい』つて」

僕も学生の頃は、準備が悪いつて母さんによく叱られたなあ。

まあ、僕より弟の方がダメ人間だったけどね。

「ふむ……。引越しをするという事ですし、馬車は必要です。わたくしたちは暇ですので、時間がかかってもさほど迷惑ではございませんし」

金は無いが暇は売るほどあるってやつだ。それに、可愛い女の子との旅って魅力的だよね。

「あはは。ご不便をかけるぶん、今回のお仕事が終わるまでの衣食住は保証しますので。たっぷり、召し上がってくださいね〜♪ さあどうぞ、ご遠慮なく。早起きしてつくつたんです、サンドイツチとか♪」

「恐縮です。すみません、ご相伴にあずかってしまつて。わたくしたち、手持ちのルビが尽きかけておりまして……その日の食事にも、事欠く有様なのでございます」

「うんうん。だから、お仕事を探してたんですもんね？ 駄目ですよ〜ユウキさん。お兄ちゃんなんですから、しつかりしないと。妹ちゃんにきちんと食べさせてあげるのは、お兄ちゃんの義務ですよ？」

スズメが若干責めるような口調で僕に言った。

ううつ、すまねえコツコロちゃんっ！ 僕のせいであつ！

「いえ、あの。ですから、わたくしは主さまの妹ではございません」  
うんうん、ガイド役で娘で本妻だもんね。凄いいラインナップだよ。

ふつ、そこにママを追加してもええんやで？（謎のドヤ顔）

「……む、むぐつ？ このサンドイツチ、何やら独特な味わいですね？」

「あつ、すみません！ 私つたらメイドなのに料理が得意じゃなくてっ、お口にあいませ

んでしたか？」

「いえ。わたくしが、この地方の味付けに慣れていないだけでしよう」

料理が得意じゃなくても大丈夫やで、スズメさん。僕なんか日頃の感謝を込めてココロちゃんに手料理を振る舞おうかと思っただけで、食材が未知すぎて断念した男だからね。蠢く魔物肉怖い。

「もぐもぐ♪ 主さまは、パクパク召し上がっておりますし」

違う、違うんだココロちゃん。僕はどんなにゲロマズで食用に適さない料理だろうと、出された物は必ず笑顔で完食することを徹底しているだけなんだ。だってわざと不味い料理を作る人なんて滅多にいないんだよ。つまり、食べる人を想ってつくった料理を残すなんて作った人にとっても失礼なんだ。

……それがどんなにゲロマズであっても。

「お、おいしくなかったら無理して食べなくていいんですよ？ ただ目的地のお屋敷までは半日ほどかかりますので、何か胃に詰めておいたほうがいいんですけどね？」

つまり無理してでも食べておけということですねわかります。

「あつ、そうです！ 料理がおいしくなる、おまじないがあるんですよ♪」

スズメはニコニコ笑顔で広げられたサンドイッチに顔を向けた。

「両手で、ハートマークをつくって……ええいつ、おいしくなあれ☆」

「……それは、何かの魔法とかでございますか?」

コッコロちゃんが困惑した表情でスズメの奇行を見ていた。

「いえ、単なるおまじないです。気休め程度には、おいしくなるはずですよ!」

「はあ、気休め程度でございますか……」

コッコロちゃんはあまり納得していない様子だった。しょうがないから、今度の休みにおすすめのメイド喫茶にでも連れて行ってあげるとしよう。

「おや、わたくしの食べかけのサンドイッチがありませんね。主さま、食べちゃったんですか?」

「ユウキさん。たくさんサンドイッチはあるんですから、横取りしちや駄目ですよ?」

そんなの酷いつ、冤罪だ! あんまりだア!

僕だつてコッコロちゃんがいけない間に彼女の下着をクンカクンカスーハースーハースることはあつても絶対に盗みはしないんだ!

僕が使用した(意味深)コッコロちゃんの下着は、宿の裏にある井戸で水を汲んでちよつと高価な匂い付き石鹸で手洗いしてるから不快感は一切無いはずだヨ!

つまり僕はコッコロちゃんの食べかけサンドイッチを食べてない。

「何のこゝとかわからな」

僕ははつきりとした口調で拒否した。

「あれっ、ユウキさんが食べたんじゃないんですか？　ということは、私のおまじないに破壊光線っぽい威力があつて、サンドイッチを消し飛ばしちやつたとか？」

何それ怖い！　それを戦闘で使えるようになってよ！　家事で火事を起こすんじゃないくてさ（激寒ギャグ）。

「もぐっ、もぐっ」

「……んん？　おやつ？　女の子がいますよ？　手を伸ばして、サンドイッチを掠め取つたっほいですが……」

ほら、やつぱり僕じゃなかったやんけ！　どう落とし前つけるんじゃない！

——可愛いから許す！

「あのう……？　もしも……、どちらさまでしよう？」

「むぐっ……？　ごほっ、げほごほっ！」

木箱の中からこつそりと僕達の昼食を盗んでいた少女がむせた。

「どうしました？　空き箱のなかに……密航者でも、いたのですか？」

「密航者というか、無賃乗車というか……うくと、困りましたね？　どうしましょう

……馬車を借りる際に交わした契約上、事前に申告した以上の人数を乗せたら駄目なんです。割増料金、取られちゃいます」

割増料金程度ならワイが払つたらろやないかい。



お金を払うことによつて可愛い女の子と話せる………ここがキャバクラ？

「でも、ちつちやい子みたいですし。お外に放り出すのも、可哀想ですよ。ええつと、お嬢ちゃん？　そこで、何してるんですか？」

「ち、ちつちやくない！　アタシは、ちつちやくないぞ!!？」

「ちつちやいですけど……えつと、無賃乗車はいけませんよ。悪いようにはしませんから、事情を話していただけます？」

スズメが優しく問いかけた。ちつちやい少女はちつちやいことを否定するように立ち上がつてぶんぶんと腕を振つていた。

僕はうーんと首を傾げる。

「家出とかですかね、アヤネちゃんと同じような………こんな、ちつちやい子が一人旅つてわけでもないでしょうし。うーん、どうしましょ？」

「だ、だから！　ちつちやいって言うなよ〜!!？　……んんっ？　あつ、オマエ！　知ってるぞ？　前に会つたことがある！」

「ふえ、スズメとですか？　ええつと……【サレンディア救護院】の子供じゃないですよ、あなた？　あのう、どなたかと間違えているのでは？」

「そう、スズメ！　そんな名前だった！　ここで会つたが、百年目……！　おい！　オマエは、アタシのことを覚えてるか??？」

「え、ええ〜つと……う？」

全く記憶に無いのかスズメが頭を抱えた。それを見た少女はスズメの肩をガシツと掴んでぐわんぐわんと揺らす。

「ひやわわつ、揺さぶらないでください！ あんまり暴れちゃ駄目ですつ、馬車が横転しちゃいますよ!!?」

「んん？ おい、おいおいおいっ?」

少女は揺さぶられて目を回したスズメを捨てて、今度は僕に近寄ってきた——つて、顔が近いっ!!? そんなに近づくと惚れるよ、僕が！

「嘘だろつ、オマエ！ オマエだよ、何でこんなところにいるんだつ？ ぜんぜん姿を見かけなかったから、心配したんだぞ〜つ!!?」

少女が笑顔でバシバシと僕の肩を叩く。ちなみに、僕は知り合いではないので、一応確認しておく。

「……『オマエ』つて、僕のこと?」

「ふむ？ 主さまとお知りあいなのですか、あなた？ 主さまは、なぜか女の子のお知りあいがおおいようですね……?」

ち、違うよコッコロちゃん！ 浮気じゃないんだ！ より良い生活を享受する為に数多の女の子と仲良くしているだけで………あれ、僕つてもしかしてクズ？

「どけつ、オマエは知らん！ 邪魔だ！」

少女がコッコロちゃんを押し退けた。おまつ、コッコロちゃんになんてことを。許さんぞ！

——可愛いから許す（二度目）！

「それより、オマエだよ！ どこで何してたんだ、これまで？ 会いたかったぞ〜プリンセスナイト……！」

プリンセスナイト？ 知らない子ですわ……。

すまそん、前作未プレイ勢をイジめるのはやめちくり〜。ついでに、君がガチャでピックアップ来た時、過去に類を見ないレベルで大爆死したからまだゲットできてないよ。だから、絆ランクもクソもない。

！  
おうおう、無課金勢舐めんな！ 運の悪さには定評のあるぼちんハメ太郎さんやで

「【プリンセスナイト】？ あなた、【プリンセスナイト】の関係者なんですか？ 私も【プリンセスナイト】の傘下ギルド、【サレンディア救護院】に所属しているんですけど……？ えっと、それ関係でどこかでお会いしたとかですか？」

「違う！ プリンセスナイトはギルド名じゃない！ どっかで変なこじつけが行われたんだ！ そうじゃない、プリンセスナイトっていうのは……」

少女があつと漏らし、周囲を警戒してまずいと呟く。ヤメロオ、スズメのサンドイツチの悪口はそこまでだ！（違う）

「この嫌な感じ……お前ら、今すぐこの馬車から飛び降りろ！」

「ええっ？」

「死ぬぞ！」

「ふえええっ!? な、なんなんですかあ!? も、もうスズメには何がなんだか分かりませんよお！」

あつ、そういうやこの後、僕たちの乗つてる馬車が石みたいなお物体を踏んだら魔法が発動して盛大に爆破されるんだっけ……いや、死ぬウ！

暢気に走る馬車を止めるべく、御者のおじさんの肩を叩く。

「おじさん、馬車を止めて」

「こ、こんな場所ですかい……？」

「うん、こんな場所で」

「そりやちよつと難しいでさあ——ヒイツ!?」

「主さまっ!?」

馬車を止めることに否定的なおじさんの首元へ腰に下げていた剣の刃を添える。

「それでも僕の言うこと聞いてくれない？」

「わ、分かりやした！ 今すぐ止めます！」

間一髪、魔法が仕込まれた何かを踏む前に馬車を止めることができたので、僕は荷台から飛び降りて御者のおじさんに馬車を下からせてから危険物の近くへ向かう。途中、コッコロちゃん達がついて来ようとしていたので荷台に留まるように言い聞かせておくのも忘れない。

原作ではオクトーがこの石っぽい何かに魔法を仕込んでいて、馬車が踏むと爆発する仕掛けになっていたと思う。そのシーンを観て最初に考えたのは「使う為に運んでいた空き箱がもれなく吹っ飛んだるやんけ」だったので、僕はそれを阻止する為に今回の行動に出たのだ。知ってるか？ 空き箱だったただじゃねえんだぞ！

……あとオクトーが悔しがってる顔を見たかった。それだけである。イケメンは僕の前から失せろ！

僕は爆発物を眼下に見据え、右手に持っていた剣を勢いよく振り下ろす。直前に遠くの方から僕の名を叫ぶ少女の声が聴こえた気もする。

——衝撃とともに魔法が発動。オレンジ色の魔法陣が展開され、とてつもない破壊力を以て至近距離に居た僕を吹き飛ばした。

……もちろんノーダメージだ。爆発に紛れて超高速で移動し、崖の上でこちらを窺っていた二人の背後へ回り込んでみた。背後へ回り込んだはいいものの、まさか二人以外

に【自警団】のモブメンバ―も居たなんて。おかげで全然近づけないけれど、会話は聞こえるようなのでヨシ！

「あれあれ、まさかムイミちゃんが無傷だなんて予想も出来なかったよ」

「なんで止めんだよツ、オクト―先輩!!？」

「だって盗聴魔法で聞いてたかぎり、ムイミちゃんと知り合いつぽかったじゃん？ 疑わしきは罰せよってよく言うでしょ？」

「うっせえ！ あいつはツ、ユウキは絶対に無関係だツ！ 先輩が止めさえしなけりや助けられたかもしれないってのに!!？」

「僕の死を悔やむマコトちゃん。うんうん、親しい人が死ぬって悲しいよね。君もそう思うでしょ？ と、僕は近くのモブ少女へ問いかけた。

「わ、わたしに言ってるんですか？ 確かに仲の良い人が死んじゃったら、わたしなら泣いちやうと思います……。しかもわたしのせいだなんてなったら立ち直れる気がしません……」

「だよね、だから僕は死ねないんだよ」

「はい、わたしも——ふえっ!!？ あ、あなたどうして生きてるんですかあ!!？」

「言葉選びが酷すぎるウー！」

モブ少女とコント紛いのやりとりをしていると、わなわなと震えるマコトちゃんと目

が合った。

「お、おいユウキ！ 生きてたのか!?!？」

「いやいや、どうやってあの爆発から逃げ果せたんだい？」

「早く動いて避けた」

「ええ……そんなのあり？ そんなことが出来たら本当に化け物だつて。嘘はダメだよ、嘘は」

「嘘だとかどうでもいい！ ユウキが生きてて良かった！」

そう言つて笑顔で僕の背中をバシバシ叩いて喜ぶマコトちゃんをスルーして、目の前でこちらを観察しているオクトーに切っ先を向ける。

「そんな危ないモノを僕に向けなくてよく。ボクはご覧のと通りの、頭脳労働専門で」  
「ていつ」

「うぎやあつ！」

「オクトー先輩ツ!?!？」

オクトーの頭を剣の腹で軽く殴つて黙らせ、マコトちゃんに押しつける。次は眼下に停車している馬車へ向かうために崖から飛び降りる。

最速で向かつてみれば、すでに我が妹（血縁関係無し）と我が姉（血縁関係無し）属するギルド「ラビリンズ」が少女——ノウエムちゃん達と戦闘を繰り広げていた。

ていうか、爆破を阻止したのに戦場で馬車がボロボロやんけ！ 馬も御者のおじさんも完全に怯えて今すぐには使い物にならんし！

原作と違って爆破によるダメージが無いノウエムちゃんは結構派手に抵抗しているようだ。

「主さまっ！」

コッコロたんが僕を見て叫ぶ。それに我が姉妹（血縁関係無し）が反応した。

「あつ、弟くん！！？ お姉ちゃんだよーっ！」

「お兄ちゃん！！？」

我が姉は手を振りながらもノウエムちゃんの首に手刀を打ち込んで見事に気絶させ、それを援護していた我が妹も全身を使って喜びを表現していた。

「ノウエムちゃんを連れて早く行って」

「うくん、なんで弟くんがノウエムを引き渡してくれるのかは知らないけど、都合が良いから今は聞かないでおくね♪」

「さっすがはお兄ちゃん！ 私たち秘密結社「ラビリンズ」の目的を知っているだなんて天帝ですね！」

なんと僕は天帝だった……？

「リノちゃん、それを言うなら天才だよつ。あと、何度も言うけど、堂々と名乗るのも内



緒にしとくべき目的を大きな声で喋っちゃうのも駄目だと思っ……ぞっ☆」

「ひぎゃあっ!? もう頭突きは勘弁してください! 頭が凹んじやいますよお〜!」

ソニックブームが発生するような頭突きを食らってその程度で済むなんて頭おかし  
いよ……(褒めてない)。たぶん僕だってちよつと無視出来ないようなダメージ受ける  
からね!?!

「……あの方たちともお知り合いなのですね、主さま? 何というか、全世界の人類すべ  
とと面識があるような勢いですね?」

コッコロたんが僕だけに聞こえるようにボソリと呟いた。

そんなジト目で見ないで! 興奮しちゃう! いや、やっぱりもつと見て!

「それじゃあ目的も達成したことだし、お姉ちゃんたちは撤退するね〜! リノちゃん  
援護して!」

「はいは〜い!」

僕の一撃で未だ気絶中のオクトーは論外として、マコトちゃんも我が姉妹を追っかけ  
たい気持ちはあるようだがリノちゃんの放つ矢がウザくて追跡が困難らしく、舌打ちし  
ながら遠のく二人の背中を睨んでいた。

「とうか僕が介入したせいでオブジェクトの変更が見られなかつたんだが……?  
ま、ええけど。環境破壊しないのは良いことだよ、とすつとぼけてみる。」

「ちつくしよ〜！ 何者なんだよあいつら！」

イライラして地団駄を踏むマコトちゃんがめちやくちや可愛い。常時イライラして欲しい（歪んだ性癖）。八つ当たりで殴ってくれるとなお良し。

「チツ、まあいい。オクトー先輩を適当に叩き起こしたらあたしらもギルドハウスに帰るぞ！ ユウキたちもついて来てくれ。傷の手当てとかするからよ」

「わかった」

たぶん抵抗してたのってノウエムちゃんくらいだからみんな怪我という怪我もしてないと思うけど、マホ姫に会いたいんで返事しました。後悔はしてない。

——そんなわけで、【自警団<sup>ガオン</sup>】のメンバーを先頭に僕たち一行は彼女たちのギルドハウスへと案内されるのであった。

いま僕の頭の中ではイエーイから始まるエンディングが流れております。コッコロたんも可愛いけど、このエンディングの見所はやっぱキヤルちゃんの泣き顔なんすわ（愉悦）。つてか、なんでプリコネのキャラって一挙手一投足が例外なく可愛いのか？ 全員推す以外の選択肢がないじゃん。もうあれだよ、ヒトリダケナンテエラベナイヨー！！



## 第二章 誓約女君

## 第1話 マホ姫のおもてなし～享楽の宴の始まり

あれから僕たちは薄暗がりの峠を無理のないスピードで馬車を走らせ、数時間後には【自警団】のギルドハウスに案内されて一休みしていた。

それにしてもなんかこのギルドハウス、ちよつとエツツツツな匂いしない？ なんか女の子の甘い匂いって言うのかな。そういえば、これは僕が発見した法則なんだけど、獣人族つて一般的なヒューマンより体臭が強い傾向にあるんだよね。しかもそこに男女の差はほとんどなくて、女性の獣人族も匂いが強いんだよ。やつぱ動物みたく臭腺とかあつたりするのかな？ ゲヘヘ、肛門腺絞りするう？ ……ちなみに、たしか臭腺は主に悪臭が出されるところだから獣人族の体臭とかは一切関係ないんだけどね。ただ僕がちよつと臭い女の子も好きなだけ（唐突な性癖暴露）。

あるかもしれない獣人族の臭腺絞りに思いを馳せていると、奥から実に優雅な歩き方でマホマホが現れた。

「あらあら、王子はんの服がボロボロや。一つうちが直しまひよ。みらくるまほりん、くるりんぱ☆」

あゝくるりんぱされるんじゃゝゝ！ マホマホの柔らかい声ホントすつき。癒されるってレベルじゃねえぞ！

「マホマホ、ありがとう」

「あゝん、もおつ。うちは王子はんにマホ姫って呼んで欲しいていつも言うてるのに、王子はんたらうちの反応を楽しむ為にマホマホなんて呼ぶんやから……ほんまいけずやわあ」

「でも嫌じゃないでしょ？」

「せやから困ってるんやんかあ……」

すすす、と地を滑るように擦り寄ってくるマホマホの頭をよしよしと撫でる。

「うちんとこのマコトはんがご迷惑かけてしもうたみたいで。ほんまに堪忍しておくれやす……」

「大丈夫、誰も怪我してない。人的被害は皆無。強いて言えば馬車がボロボロだけど、それは謎の二人組とノウエムちゃんので、マコトちゃん達のせいじゃないから」

「せやけど、王子はん達の馬車を襲おうとしたんは事実やし、馬車の手配や諸々の賠償はうちらがせゝんぶするから王子はん達はゆっくりしていつておくれやす」

「わかった」

あの、マホマホ可愛すぎない??? なにこの、この……（語彙力喪失中）

とにかく良い匂いするし、くつついて来るとやあかいし、ウ、ウガアアアアアアアアアア!!? ……ふう。クールに行こう。そう、クールだ。

……頭撫でると耳をぴこぴこしながら上目遣いで見つめてくるの本当にどうにかならない? 撫でるのやめろって? 手を離れた瞬間、残念そうな顔してお耳がしょんぼり垂れる美少女を放っておけと? そんなこと出来るのクズか聖人か唐変木主人公くらいだろ常考。

☆☆☆

とりあえず僕はマホマホを撫で撫でする機械となつて無心で撫で続けた。あまりに意識が飛び過ぎて気づいたら事態が急変していたのを知つたのは、胡座をかいて座つたマコトちゃんが床に拳を振り下ろした時だった。

「ともかく、ものすごくヤバい状況だ! あたしらハメられたんだよ!」

「ハメられたつて誰にやのん? その黒幕つていうのは一体——」

マホマホの言葉を遮るように突如として轟音が響き、ギルドの壁が盛大にぶち破られ、壁の破片と土煙が舞う。その大穴を堂々とした足取りでずかずか侵入してきたのは金髪の痴女だった。いやマジで。

「どういう思考回路してたら公衆の面前をそんな半裸みたいな格好で歩けるの？ いや、この人のことだから「ハハハ、何故隠す必要がある？ この私に隠すべきものなど何もないさ☆」とか言いそう……。」

僕の中のクリステイナーが大仰に手を広げて自慢げに見せつけてくるなか、壁をぶち抜いたクリステイナーは偉く上機嫌な表情をして「自警団」のギルドに入ってきた。

「ハア〜イ、呼ばれて飛び出てグッドナ〜イト♪ 夜分遅くに失礼する。歓迎してくれ、お客様だよ☆」

「あっ」

「おいおい、そこにいるのは坊やじゃないか☆ こんな獣臭い場所で偶然会うとは些かロマンチックじゃないが、どうだ？ 私と結婚する気になったか？」

「えっ、結婚？？ 王子はん？？」

「ユウキの知り合いか？？」

クリステイナーさんやめてエ！ 話をややこしくしないでエ！

「……………」

「フツ、だんまりか。相変わらず静かすぎるくらい静かだな、坊やは。まあ、いい。将来の話は後でじっくりするでしょう。家無し坊やは後でこのクリステイナーさんが引き取るとして、まずは仕事だ！」

クリステイーナが剣を構える。その際に双丘がぶるんと揺れたのを僕はもちろん見逃さなかったし、何なら求婚しそうになった。もう、ゴールしてもいいよね——

あかんユウキ……来たらあかん！ ゴールしたらあかん！ 始まったばかりやんか！ 昨日やつとスタート切れたんやないかあ！

——あつぶねえ、晴子さんがいなかったらゴールしてた……。

とまあ、そんなボケは横に置きつつ、マコトちゃん達と騎士団の一触即発の空気の中で僕は徐に立ち上がる。

「クリステイーナさんは戦いでドキドキしたいんだよね？」

「どうした、急に。ん、まあ、そうだな！ 私は心躍る殺し合いがしたいんだよ！ こんな平和し腐った世の中じゃ全くもつてつまらない！ だからコイツら獣人の襲撃は私にとつて待ち望んでいた大義名分というわけさ……☆」

「そう、じゃあ僕と戦おう」

「坊やと戦う？ フツ、アハハハハ☆ 坊やと戦ったところで私のこの昂りは抑えられんよ！ 第一、『おまえは弱すぎる』」

クリステイーナは弱かった僕しか知らない。偶に会う時だつて僕が配達のアルバイトをしていたりと戦闘しているところを見られたことはなかった。

だからだと思ふ。……ちよつと性的に興奮し、いや、口が滑った。腹が立ったのだ。



僕には必殺技も無ければスキルもない。ただ他者を強化するだけ。戦う女の子を後ろで強化するという主人公に相応しい特別なチカラだけ。

クリステイナーの言葉はおまえは守られる存在だと、女子供や戦えない人々と何ら変わらない。そう言われている気がした。

端的に換言して、僕はほんのり腹が立ったのだよと己の内に飼うユニちゃんが顔を覗かせた。

「表に出ようか……久しぶりに……キレちまったよ……」

「主さま!?」

コッコロちゃんのかげを無視してクリステイナーを連れ立って壁の穴から外に出る。周囲を取り囲んでいた騎士の一人が逃すまいと思ったのか取り押さえようと飛びかかってくるものの、それを横に一步ずれることで避ける。

「おまえたち、邪魔はしてくるなよ? この坊やが私と遊んでくれるそうなんだ! 邪魔しようものなら獣より先に始末するぞ☆」

クリステイナーの一言で騎士達は微動だにしなくなった。あつ、この反応……(察し) 上司の命令だからとかじゃなくて過去に本当に被害に遭った者達だ、面構えが違う。ヘルムで顔は見えないけど。

「さあ、ここから良いだろう! 坊やの本気を見せてもらおうか!」

相対したクリスティーナがとても楽しそうに嗤った。